

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	烏力更（中華人民共和国）
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第8号
学位授与の日付	平成25年9月19日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第1項
学位論文題目	中国におけるモンゴル民族学校教育の研究
論文審査委員	主査 田中圭治郎（佛教大学教授） 副査 原 清治（佛教大学教授） 副査 杉本 均（京都大学大学院教授）

### 〔1〕 論文の概要

本論文は、中華人民共和国成立以降、社会主義理念の下で、各民族のアイデンティティを保障することによって1つの中国としての国家建設の礎を築いてきた過程を論述してきたものである。55の少数民族を抱える中国にとって少数民族政策は国家統一のため、あるいは国家発展のために、きわめて重要な課題である。本論文は、少数民族の文化を尊重し、「中華民族一体構造論」の考えの下、多くの民族を1つの中華民族としてまとめ「和諧社会」を求める少数民族教育政策の実態と課題をモンゴル民族に焦点を絞って論じている。

本論文の構成は、3部より構成されている。内容は以下の通りである。

序章 研究の目的、先行研究、研究方法、今後の課題、本研究の特徴・意義

第Ⅰ部 モンゴル民族におけるアイデンティティの形成

第1章 仏教がモンゴル民族（人）に与えた影響

第2章 内モンゴルにおけるモンゴル民族の近代教育

——貢親王の学校改革を中心に——

第3章 内モンゴル自治運動期におけるモンゴル民族教育

第4章 中国内モンゴル自治区における民族の課題

——民族意識に関する実態調査から——

第Ⅱ部 新中国における少数民族地域学校教育政策

第5章 中国における少数民族政策及び少数民族教育

第6章 中国における義務教育制度

第7章 中国における素質教育の諸問題

第Ⅲ部 内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育の現状

第8章 モンゴル民族教育とアイデンティティ

## 第9章 中国における思想道德教育

### 終章 少数民族学校教育におけるアイデンティティの形成阻害、モンゴル民族学校教育とモンゴル人教師・文化人の役割

となっている。

序章では、研究目的は55の少数民族を抱える中国にとって、国家統一のため、あるいは国家発展のために、民族政策はきわめて重要な課題のひとつである。ウルゲン氏は少数民族にとって、教育はアイデンティティ確立にとっては不可欠であり、伝統文化を学び、民族意識を培う上で必要であるとし、そのためどのような教育がなされるべきかを、内モンゴル自治区の実践を検証することによって明確化しようとする。彼によれば、中国における「多元・一体」理論は、社会主義思想の下に教育実践されてきた。それは「各民族は一律に平等である」であるとする。憲法は4回改正されたが、それぞれの民族の文化を大切にするという基本理念には変化は見られない。

第Ⅰ部 「モンゴル民族におけるアイデンティティの形成」第1章「仏教がモンゴル民族（人）に与えた影響」では、チベット仏教の影響を受けたモンゴル仏教の寺院教育が人々の教育を担うとともに、文化的基盤を形成している。第2章「内モンゴルにおけるモンゴル民族の近代教育——貢親王による民族文化復興運動」では、内モンゴルの一地方の王、貢親王が清朝末期、満州族からの自立を図り、そのため日本、ロシア、中国から文物を取り入れ、モンゴル独自の制度を打ち立て、かつ独自の教育を建設することを意図した。しかしながら、他地域の王たちの支持がなく、意図が不発に終わる。第3章「内モンゴル自治運動期におけるモンゴル民族教育」では、中華民国の漢族に同化させる「大漢民族主義」に抵抗した一地方の王、徳王が貢親王の意志を受け継ぎモンゴル人のための小学校設立の動きについて論じている。しかしながら日本関東軍と協力して、内モンゴルの自治運動を進めたため、「売国奴」「民族復興のための教育を推し進めた人物」との両極端の評価を受ける。第4章「中国内モンゴル自治区における民族教育の課題——民族意識に関する実態調査」では、ウルゲン氏自身直接現地に出かけて民族意識調査を内モンゴル師範大学経済政治学院（学部）モンゴル語コースの1-3年生全員、大学院生全員、内モンゴル工業大学財政学院（学部）モンゴル語コースの3年生全員、内モンゴル自治区蒙古族専門高等学院（短大）社会学部生全員の合計約400人対象に行った結果である。「民族の発展のために尽力したいが恐れていますか」という質問に対し、51.1パーセントが「恐れている」と回答している。「漢族を優れていると思いますか」という質問に対して、「はい」は、20.8パーセント、「いいえ」は78パーセントと回答とし、漢族に対して否定的な者が多いが、モンゴル人自身欠点を「アルコールに依存している」「なまけ者が増えている」「団結が良くない」「競争心が弱い」という自己評価が漢化の影響が強く、子どもたちの民族意識の成長が妨げられているとする。

第Ⅱ部 「新中国における少数民族地域学校政策」第5章「中国における少数民族政策及び少数民族教育」では、少数民族への優遇政策がとられているにもかかわらず、「国家・国民」への統合を求めるため、結果として少数民族の文化を軽視することになり、彼らの反発を招く。第6章「中国における義務教育制度」では、1986年の義務教育法から2006年の改正義務教育法までの経緯が述べられている①義務教育投入予算の不足、②子どもの過重な学費負担、③教育資源の地域間・学校格差、④学校による不当な経費徴収、⑤重大

な学校事故の発生、⑥教科書編纂をめぐる不当な利益追求が存在するという旧法に比べ、新法では、「義務教育の実施では、学費、雑費を徴収しない」のであり、少数民族の子どもたちの就学率が上昇している。ここで問題点は、①民族教育を受けた子どもの方が、受けない子どもより就職が不利になること、②都市籍と農村籍の子どもの教育格差があると指摘している。第7章「中国における素質教育の諸問題」では、応試教育を否定して素質教育が出現した状況が述べられている。素質教育が貧しい農村・山間地域と都市部の社会的地位が低い労働者の子どもや若者の社会的地位の上昇を図るためのものであった。それは、①知識偏重の否定、教科横断的な総合的科目の設置、③子どもの関心と経験の重視、④主体的な学習、⑤教育評価における選別、選抜の否定、⑥カリキュラムの地方分権化、であり、日本のゆとり教育を参考にしたものといわれている。

第Ⅲ部 「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育の現状」第8章「内モンゴル民族学校教育とアイデンティティ」では「中国における少数民族学校は、少数民族の自律発展・自己確立にとって重要な位置を占める教育機関」であるが、ウルゲン氏は「少数民族教育を担うべく設立された少数民族地域における民族学校教育が、むしろ民族としてのアイデンティティの形成を阻害している」とする。この章では、少数民族学校モデルともなっている寄宿制学校教育を取り上げている。この学校ではモンゴル語の学習に時間を割くため、上級学校への進学に際して不利益を被るとして保護者から不満が出ているのも事実である。少数民族の保護者が民族性を否定し、自分の子どもを「漢人学校」に通学させることによりわが子に良い職を得させようとしていることが伺われている。少数民族自身が自己の民族性を否定していることがわかる。その結果、多くの若者がモンゴル族であることを恥じ、自己不全に陥り、無気力になり、時としてアルコールに浸るという。「開放改革」政策の下、人々の考え方が変化し、「愛国教育」に力点が置かれてきており、儒教思想「君臣の道」である道徳が重視されてきたが、漢民族中心の考え方であり、少数民族の伝統的教育が軽視されてきたと主張する。

終章では、(1)「少数民族学校教育におけるアイデンティティの形成阻害」では、「生態移民政策」という牧畜の禁止により、「牧民」は故郷を捨てて、出稼ぎ生活を強いられ、民族としての尊厳を保つことが困難となるという状況であり、(2)「モンゴル民族学校教育とモンゴル人教師・文化人の役割」では、激しい競争社会の中で、漢民族の文化に同化させられたという状況に対するモンゴル人・文化人の苦悩が描かれている。(3)「少数民族教育と「多元・一体」の「和諧社会」の実現」では、文化的多元主義の理念の下でなされてきた民族教育の結果、「自文化を卑下し、自己不全に陥っている若者の増大」をもたらし、「多元・一体」の理念の教育政策に疑念を持ち、中国の55の少数民族の文化を生かす教育とは何かを提起している。

## 〔2〕審査結果の要旨

本論文は、中国の文化的多元主義の視座の下での教育政策を総合的に検証したものである。それは社会主義の理念に基づいた民族教育の実践はいかにあるべきかを示す。ウルゲン氏はそれを4つの点から研究している。

まず1点目は、中国におけるモンゴル民族の教育改革の動きを、様々な資料に当たって、

清朝末期から現在までについて記述している。中国の民族教育の歴史は、主として中央政府の視点からの教育方針の紹介がなされていたが、本研究では、モンゴル族（人）の立場からの教育が述べられている。特に第Ⅰ部では寺院教育、貢親王による清朝末期の教育、徳王の中華民国時代の教育改革について、数少ない資料を発掘することにより、モンゴル族文化の独自性を示すとともに、諸外国の文化を導入しようとしたさまざまな試みが存在したことを明らかにした。

2 点目はモンゴル人の民族意識のアンケート調査をしたことである。町市部では漢族との接触が多いため、漢族に対して男女共半数が「尊敬する」と回答している。特に、「半牧半農」地区からやってきた女性の 81.8 パーセントが「尊敬する」と回答している。このことからモンゴル族の若者の漢族への同化傾向が強いことがわかる。ウルゲン氏は民族のシンボル（たとえばチンギス・ハーン）が否定されることにより、民族の誇りを失ってきたモンゴル族の若者が多いという実態を明らかにした。

3 点目は、第Ⅱ部、第Ⅲ部において、中国の教育改革、応試教育から素質教育への過程で、一人ひとりの子どもたちの可能性を伸ばすことが重視されてきたにもかかわらず、現実にはさまざまな問題点を生じてきたこと、特に少数民族にとって自分のアイデンティティを意識しなくなった。中国における素質教育は、子どもの自尊心を尊重し、差別をなくし、平等に育てる教育であり、子どもの負担を減らすために学期テストをなくし、子どもの全面的な発達を保障する教育であるとするが、しかしながら、「すべての生徒に向き合う教育という素質教育の理論」が、現実の教育現場においては「富裕家庭、官僚の家庭、時間的余裕がある家庭の子どもたちの潜在能力を発揮させることを重視する教育」になり、素質教育の「技能能力」を過度に要求し、真の知識を軽視した結果、貧困農村・山間地域の義務教育段階の生徒たちが受験競争に敗れ、卒業後、出稼ぎ労働者になり、大都市で働くようになる。また、人々の「拝金主義」・「汚職問題」解決のために儒教を中心とした道徳教育が奨励されるようになるが、それは漢族中心の価値観の押しつけに繋がり、少数民族の子どもにとって、可能性を伸ばすための教育にならないとする。

4 点目は、文化的多元主義と国家・民族との関係について述べている。内モンゴル自治区の少数民族の子どもたちが、依然として貧困のため、教育機会が奪われていること、また「漢族の学校」（公立の学校）に入学することにより、彼らが完璧に漢化され、自分の民族性が失われるとする。少数民族が自己の文化を否定され、行動様式が完全に主流派に同化したのかかわらず、差別され、社会に同化できないため、彼らは無気力な状態になったと指摘している。内モンゴルの民族学校の教師として勤務した経験から、自己の出自のモンゴル民族に焦点を当て、中国人という概念の下で、モンゴル族の子どもたちの教育はどうあるべきかを研究し、現在、社会変容の中で彼らが直面しているアイデンティティ危機にどのように取り組むべきかを論じている。少数民族、特にモンゴル民族の教育が中国の「漢化・同化政策」の中でどうあるべきかを論じ、各民族が自分の文化に誇りを持ち、伝統文化を保持しながら、「中国人」としての意識を持たせるべきかが論じられている。

以上、本論文は、「民族主義」と「国家・国民への統一」という時として相克する問題をモンゴル族の事例により、明確化しようとした。現在、世界の多くの国々は多文化社会・多民族社会へと変貌を遂げている。本研究は、文化的多元主義と国家の統一という問題

の相矛盾する問題の解決という大きなテーマに取り組んだ意欲的な論文である。

次に、本論文の問題点について述べる。1 点目は、素質教育の理論と実践の乖離の指摘がなされている。それは、都市籍・農村籍及び地域間の格差によるもの、思想道德教育の結果であることは理解できるが、必ずしも少数民族の教育と直接結びつかない。2 点目は、モンゴル族の民族教育が中心であるが、他の少数民族の教育問題が触れられていない。そのため、中国全体の少数民族の教育との比較が求められる。3 点目は、内モンゴル自治区でのモンゴル族に対するアンケート調査がなされているが、データー分析と解釈に正確さが欠ける。貴重な調査であるがゆえにもう少し丁寧な分析をする必要がある。4 点目は、ウルゲン氏の出自がモンゴル族であるため、自民族に対する思い入れが強すぎる側面がある。

以上述べてきたように、本論文の問題点を指摘してきた。しかしながら、中国の少数民族の教育問題を明確な意識を持って考察、分析したことは評価できる。よって、本論文が博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断する。